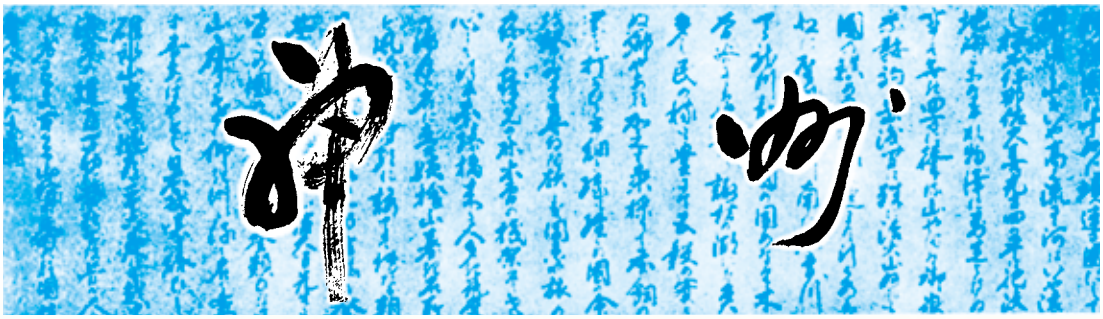

長野県神社庁報　第137号
令和５年８月１日発行：長野県神社庁 庁報発行委員会・庁報編集委員会
（長野市箱清水1-6-1　電話026-232-3355　FAX026-233-2720）

庁舎・氏子会館 上棟祭

上棟祭　曳綱

目次

目次　日誌抄　2
日誌抄　3
庁舎・氏子会館建設事業報告　4
信濃国二之宮　小野おんばしら　6
特別寄稿
「薙鎌の新たな理解を目指して」　10
教化部各委員会事業報告　12
戸隠山安全祈願祭及び開山式　16
新任神職の横顔　17
寄附者顕彰
神社本庁表彰　辞令　18
令和五年度歳入歳出予算書・
災害慰藉予算書　20
暑中見舞　21
「新神社庁氏子会館竣工検査」　24

日誌抄

（令和四年十二月～令和五年六月）

令和四年　十二月

一日　月次祭
二日　建設工事定例会
五日　県内紅葉会懇話会　於　長野市
八～九日　第六十八回伊勢神宮新穀感謝祭
十三日　庁舎氏子会館建設委員会
十三日　理事・支部長合同会議
十四日　祭祀委員会　於　松本市
十六日　総代会支会長会
　於　ホテルメトロポリタン長野
二十三日　建設工事定例会

令和五年　一月

二日　月次祭
十三日　建設工事定例会
十三日　庁舎氏子会館建設委員会
　（特別委員会）
十八日　新年初会議
二十四日　教化部合同委員会
二十六～二十七日　東海五県神社庁事務研修会
　当番　静岡県
三十日　建設工事定例会
三十日　別表・特別神社宮司会
三十一日　県遺族会主催
　沖縄「信濃の塔」慰霊祭
　木曽支部奉仕（～二月三日まで）

二月

一日　月次祭
二日　人事諮問委員会

七～八日　神政連県本部視察研修
　於　福岡県・山口県
八～九日　祭祀舞研修会
十三日　庁舎建設事業「上棟祭」祭員習礼
十七日　祈年祭
十七日　建設工事定例会
二十日　辞令伝達式

二十日　理事会
二十一日　総代会監査会・役員会

二十四～二十五日　浦安の舞研修会　於　深志神社
二十四日　神政連県本部役員会
二十七日　青少年対策推進委員会
二十七日　建設工事定例会
二十八日　庁報編集委員会

三月

一日　月次祭
三日　神宮大麻暦頒修奉告祭
五日　神宮大麻暦頒布終了祭　於　神宮
六日　東海五県臨時本庁評議員会　於　愛知県
七日　庁舎建設事業「上棟祭」
八日　調査委員会　於　松本市
十日　東海五県神社庁教化神政連合同会議　当番　静岡県
十四日　総代会定例代議員会
十六日　百二回神社庁定例協議員会
十七日　神社庁長会　於　本庁
二十二～二十三日　第二十五回子供参宮団
二十二日　庁舎建設事業に関する祭式講師研究会
二十四日　建設工事定例会
二十四日　神政連長野県本部代議員会
二十七日　事務担当者会
二十七日　神職総会
二十八～二十九日　過疎地域神社研究会　於　本庁

四月

三日　月次祭
三日　祭祀委員会　於　木曽郡木曽町
五日　総代会役員会
十二日　建設工事定例会
十三日　辞令伝達式
十三日　理事会
二十日　教化委員会　於　穂高神社
二十六日　建設工事定例会

五月

一日　月次祭
十日　東海五県神社庁評議員会　於　岐阜グランドホテル
十一日　東海五県神社庁連合総会　於　長良川国際会議場
十二日　建設工事定例会
十八日　庁舎建設事業「仮殿遷座祭」
十九日　青少年対策推進委員会
十九日　庁報編集委員会
二十二日　祭祀委員会
二十三日　全国神社総代会代議員会　於　本庁
二十四日　神社本庁表彰式　於　明治記念館

二十五～二十六日　神社本庁定例評議員会　於　本庁
二十六日　班幣式
二十九日　教養研修会　於　穂高神社
三十日　調査委員会　於　深志神社
三十一日　建設工事定例会

六月

一日　月次祭
五日　県下神職球技大会　於　木曽
九日　庁舎氏子会館建設委員会
十二日　神政連本部長・事務局長連絡会　於　本庁
十二日　神政連国会議員懇談会総会・合同懇談会
十三日　神政連中央委員会　於　本庁
十三～十四日　神社庁事務担当者会　於　本庁
十六日　教化部役員会
十九日　庁報編集委員会
十九～二十二日　東海地区中堅神職研修会　当番　岐阜県
二十日　中信地区連絡協議会
二十二日　東海五県参事会・精算会　於　岐阜県
二十六日　雅楽研修会
二十八～二十九日　神宮評議員会　於　神宮

令和御大典特別事業

長野県神社庁庁舎氏子会館建設事業

三月七日　上棟祭

令和五年三月七日午後二時より、庁舎氏子会館の上棟祭が行われました。庁舎氏子会館の建設地は、明治天皇が明治十一年に御巡幸された際に長野町に駐輦（ちゅうれん）あらせられて、城山の御仮宮の高処から善光寺平と四郡を御覧あそばされ、「佳境（かきょう）」のお言葉を賜った聖なる土地でもあります。この際、安茂里（あもり）の有志が高土手より煙火を打ち上げ御旅情をお慰め奉ったといいます。

春暖快適の午後、足場に囲まれた建物は壁や柱、鉄骨の梁や桁はまだむき出しの状態です。

上棟祭の祭場は「拝殿・講話室」に設営されました。今後、上棟祭をされる参考のために祭場の舗設を紹介しますと、屋根の梁の左右に紅白の曳き綱が結びつけられ紐は左右の案の上に纏められています。

正面の奥は、松鶴長春（しょうかくちょうしゅん）の扇車に、大工の守り神となった京都千本釈迦堂の頭領の妻おかめの面を結びつけ、白色の幣と五色絹を提げた「幣串（へいぐし）」が三本飾られています。

向かって右には彩色が鮮やかな「天の弓矢」、左に「地の弓矢」が飾られています。「天の弓矢」には鏑矢（かぶらや）がつがえられ鬼門（東北）を向き、「地の弓矢」には雁股矢（かりまたや）がつがえられて裏鬼門（西南）を戒めています。中央には槌打ちに用いる神柱（しんばしら）が刺し立てられ、神殿の土台を固め鎮めます。

続いて神籬、神饌の弁備案があり、向かって右側に墨痕鮮やかな滝和人神社庁長の揮毫による棟札が立てかけられました。また、振り幣が立てかけられた案の上には、神前に置かれる工匠の三器といわれる曲尺（かねじゃく）・墨壺・釿（ちょうな）が供えられています。向かって左には修祓（しゅばつ）用具案、さらに大きな木槌と当て木を載せた案があります。

このことから今回の上棟祭は、「曳き綱」「槌打ち」を眼目とすることが

わかります。

参列者は神社庁長を始め建設委員、隣接地の宮司、施工業者代表の四十名です。祭典奉仕者は、斎主に水野副庁長、副斎主に平澤理事、祭員は県神道青年会、県女子神職会から一名ずつ、典儀は県祭式講師から一名が奉仕しました。

祝詞奉上

祝詞奏上の後に、工匠長、検知役が設計施工者から召し出され位置に着き、曳き綱の儀が行われました。向かって右に滝庁長、藤村吉彦県総代会長を始め参列者が、向かって左に斎主・祭員・工匠が列び曳き綱を執りました。振り幣役の発する「エイ、エイ、エーエイ」に「オー」と応え、諸員は「エイ、エイ、エーエイ」と発声し曳き綱が三度繰り返されて、木遣り歌が流れました。

続いて槌打ちの儀では、神柱を棟木に見立てています。振り幣役は左右左と幣を振る毎に「千歳棟」「万歳棟」「永永棟」と発声し、それぞれに「オーー」と応えるのを聴き、槌打ち役は「オウ」と応えて神柱を二度打ち固め、新殿に禍なく、幸あれかしと乞い願いました。

槌打ち役

祭典終了の後、お下がりとして「散餅銭」が配られました。

五月十八日　仮殿遷座祭

午後六時に浄暗の中、陰灯の明かりを頼りに神殿の仮殿遷座祭が行われました。奉仕したのは滝県神社庁長、水野県副庁長以下、県理事、神社庁職員の二十二名。無事に神殿の御神体は、隣接する氏子会館の研修所を仮殿として御扉の奥に遷座されました。

氏子会館内仮殿

五月二十五日　空殿を移設（追記）

空殿を講堂二階より慎重に搬出し、建設地の「拝殿・講話室」の奥に移設しました。

移設する空殿

これからも事業完遂のために皆様のご協力をよろしくお願い致します。

編集委員　齋藤英之

信濃国二之宮 小野おんばしら

小野神社

禰宜　宇治橋邦彦

四之柱の建立も終わり、修納奉告祭を斎行し、実行委員の万歳三唱が憑（たのめ）の里小野神社の杜に響き渡りました。後日の根固御霊入れの儀を以て令和初めの「令和五癸卯歳式年御柱大祭」が全て収まりました。

振り返りますと、平成三十年の台風二十一号の強風被害で、当社も倒木により県宝の本殿が倒壊しました。復元された本殿に、今回御神体が遷座されましたことは非常に感慨深いものでした。また諸祭事、特に元伐祭や山出祭は雨天であった為、里曳と建御柱の三日間が好天に恵まれ賑やかに無事であったことの安堵はひとしおです。現在ではコロナ禍の状況も好転してきましたが、計画当初の令和三年十二月の時点ではまだまだ手探りの状態で、いかに安全に執り行うかが課題でした。実行委員会自体の開催も細心の注意を払いながら会議を重ねてきました。氏子の御柱に対する情熱と伝統行事の継承の為に心を一つにしました。「綺羅を見たけりゃ小野御柱」と言われるように柱ごとの衣装はさることながら、各区で独自の御柱マスクを作成して安全を重視しながらも楽しみつつ準備をしてきました。

子供木遣

雨の山出祭

塩尻市北小野は辰野町に隣接しています。

辰野町に矢彦神社、塩尻市に小野神社が同じ社叢に鎮座しています。それぞれ独立していますが、御柱祭は共に卯年と酉年の五月に建御柱を行いま

神社への曳き入れ

雨の曳行

す。この地域を両小野と言い、地域を超えて協力します。今回、小野御柱推進協議会が北小野出身の漫画家・波切敦氏にポスター原画を依頼し、その迫力ある出来栄えに話題となりました。また、SNSも駆使し、両社の御柱情報を詳細に発信し、里曳にはGPS発信器を携行することにより両小野振興会ホームページで各柱の曳行状況が把握できる試みも取り入れました。スマートフォンから確認できますので非常に便利でした。両小野中学校の生徒が生み出したPRキャラクター「うとうくん」も境内で盛り上げてくれました。その人気ぶりには驚くばかりです。御柱の曳行には木遣は欠かせません。地域でも継承の為に子供たちに教えています。雨の山出祭にも小さい体で一生懸命おんべを振り、木遣唄を鳴いている姿は可愛らしくもあり、また将来の担い手であることに希望を持ちます。

北小野地区は塩尻市の中でも人口減少の多い地域でもあります。次回の御柱祭を危惧する声も聞かれます。しかしながら氏子のお宮への思いや崇敬の念、情熱で今回の御柱祭が無事斎行されたと思います。時代の変遷とともに御柱祭も変化しています。ただ、先人達からの思いは確実に受継がれています。私も仲執持としてその思いを伝えるべく、神職として益々の精進が必要であると深く心に刻み込んだ御柱祭でした。

御柱ポスター

「うとうくん」

建御柱

にぎわう境内

矢彦神社

禰宜　立澤　俊輔

「えっと、何をしてましたっけ」最初の会議で、総代さんに聞いたことはこれでした。前回は、神職としての経験も浅く、流れのままに動いていたように思います。しかし、流石なもので総代さんたちは「この時はこうだったよね」「あれはこんな風にやっていたよ」と的確に覚えており、驚愕しました。総代さんに助けられながら会議を重ね、少しずつ御柱大祭に向かって進んでいくのは、もちろん不安もありましたが、とてもワクワクもしていました。十月に入り、各御柱の斧入祭が斎行されました。一之御柱はもとよりどの柱も大きく素晴らしく氏子の人たちの心意気を感じました。斧入祭の後、御柱は山を下りそれぞれの里でお休みになります。年を越しての三月、山出祭には綺麗に整えられ、全貌が見えなかった御柱の立派な姿に心が震えました。

遷座祭

雨に清められながらのお祭りもありましたが、それにも負けない氏子さんや柱に関わる人たちの一致団結の心、木遣りの声で無事に山出しが行われ、御柱休処に引き付けられました。里曳きを楽しみに待ちながら、それまでに境内の整備を行いました。総代さん、祭事係さんの協力のもと、境内の掃除や雨儀廊などの飾りつけ、三大灯籠を組み立てたりと境内も賑やかになっていきました。四月卯の日、遷座祭となります。今年は前日に雨に降られてしまい予定していた準備が行えず、当日は慌ただしくなってしまいましたが、準備が整い一つ一つの手順を確認しました。陽が暮れていく中、着装を済ませ気持ちを落ち着かせ、暗闇に包まれた斎庭で粛々と行われる遷座は、いつもとは違う不思議で幻想的でもあると感じました。厳粛のうちに斎行された遷座祭、その夜は緊張と緩和で総代さんや来賓の方々とお酒を酌み交わしながら、語り合いました。恙なく終えたことを感謝しつつ、余韻に浸りながらもすぐに里曳き建御柱が始まります。

里曳きの朝

里曳きの早朝、青年団が御柱に付ける御幣を取りに来て、それぞれの地区まで勢いよく担いでいくのに驚かされます。氏子さんはも

鳥居前の大曲

鳥居前の祓い

ちろんのこと、内外より大勢の人が集まり曳く里曳きの始まりです。三日間の初日は、途中までの曳行、二日目は、いよいよ御柱が境内に曳きつけられます。一と四の御柱は、鳥居前の大曲。二と三の御柱は、国道を勇壮に曳いてきます。鳥居の前で一度止まり、お祓いをします。そこから、今一度心を一つに一気に境内に曳き入れます。大勢の人が御柱と共に流れ込み、賑わいが増します。四本とも曳き込み、建立の位置で曳行は終わり、大切なお祭りの一つである御柱大祭が斎行されます。落ち着きを取り戻した境内に雅楽の音色が響き渡り、神楽舞青年団六社による舞の数々が境内を更に彩りました。三日目、昨夜のお酒の影響もなく、爽やかな朝を迎えました。心配をしていた天気も、氏子の皆さんの気持ちが届き、晴天に恵まれ、御柱祭で最も注目される建御柱の日がやってきました。記念撮影が終わり、人も境内に溢れかえる中、木遣りの声が響きいよいよ始まりました。一緒に聳え立つ様子を見ていたかったのですが、境内の盛り上がりをよそに未だ人気の高い御朱印の対応に追われ、やっと外に出ると、一之御柱が建つ寸前、柱のてっぺんに勇敢にも立っている人たちは、格好よく輝いて見えました。順に御柱が建ち、真新しい木の枠、注連縄を取り付け根固めの神事。四之御柱まで終えると、そのまま終了の報告祭を行い、そこに出揃った建方衆は、とても誇らしい顔をしていたのを今でも覚えています。その後、建方衆を慰労する為の宴席を神楽殿で行いながら、夜もふけていきました。心を一つに行われる御柱。無事に終わったことを感謝しつつ、人の力と気持ちの強さを再度、実感したお祭りとなりました。

浦安の舞

青年団六社連合の奉納

雲助長持ち

勇壮な建御柱

建御柱万歳

「特別寄稿」

薙鎌の新たな理解を目指して　1

長野県立歴史館　特別館長　笹本　正治

本号の特別寄稿文は長野県立歴史館特別館長笹本正治先生にご執筆いただきました。笹本先生は、信州大学名誉教授。専攻は日本中世史・近世史です。信州大学教授、同学副学長を経て、平成二十八年より長野県の歴史、考古、民俗などを総合した長野県立歴史館の特別館長として精力的に活動をされています。

近年は御柱祭に使用する薙鎌について、各地を渉猟され論究を進めています。庁報『神州』では寄稿いただいた論文を本号から数号に分けて掲載していきます。

1　現代の薙ぎ鎌

令和四年（二〇二二）一月一日発行の『神州』第一三四号の表紙には、鳥のような形をした薙鎌が掲載され、小谷村の大宮諏訪神社の杉本宮司が「国堺境見の神事」として、諏訪大社御柱の前年に国境の神木に打ち付ける行事から、薙鎌の解説をされています。

八月の最終日曜日、諏訪大社宮司が大宮諏訪神社へ参向して、薙鎌一口を宮司へ渡し、神前に奉献する奉告奉献祭が執り行われます。翌日、もう一口の薙鎌の入った唐櫃が丑年に小倉明神、未年に境の宮へ運ばれ、薙鎌は神木に打ち込まれます。

神事の薙鎌は諏訪大社からもたらされ、諏訪大社宮司と大宮諏訪神社宮司が主役です。薙鎌打ちは信濃の国境を示し、諏訪明神の神威の直接及ぶ範囲を示す神事であったといわれますので、薙鎌は間違いなく諏訪信仰に関わる重要な神器です。

諏訪大社の催されるいくつかの行事にも薙鎌が登場します。二月一日の下社の春の遷座祭は前年の八月一日から秋宮に祭られていたご神体の御霊代を春宮へと遷す行事です。神主が先頭になり、白装束で柄のついた薙鎌を持つ二人、幟旗などを手にした氏子たち、さらに御霊代が乗った神輿などが続きます。この際の薙鎌は、行列の威容を整えるための威儀物として使われています。威儀物といえば弓・箭・胡籙・太刀・桙・盾などの武器が中心ですから、薙鎌には武器としての要素が強く意識されていたのでしょう。

境の宮諏訪神社　神木の薙ぎ鎌（小谷村）

行列で用いられる薙鎌は柄の先に付けられ、全体が丸い形で、目が開いていて、顔は下を向き、嘴の角度が下がっているために、ややうなだれたように見えます。

正面から見るのではなく、下から見上げさせるためにこのような形になったのでしょう。背の側には頭の下から十三の羽（鰭、以下便宜上羽で統一）のような刻みがついています。嘴は尖って閉じ、嘴の中に切れ目が刻まれているものや、先があいているものなど変化があります。同じ場に並ぶ薙鎌は毎年作り替えませんので、必ずしも同じ形ではないのです。

いずれにしろ、薙鎌は諏訪信仰とは切って見きれない関係にあります。上社の御柱に際しては、里曳きの時に御柱を迎えにいく「お舟」と呼ばれる御輿と、二口の薙鎌が出ます。加えて上社では宝殿の造営が竣工すると正面の御扉に薙鎌を打ちます。加えて、上社の御頭祭、酉の祭に際しては、威儀物として六本の薙鎌が並び立ちます。

御柱祭の薙ぎ鎌

諏訪大社では御柱の前年に御柱用材八本を正式に決める「本見立て」が執行されます。上社では八本のモミの巨木が選ばれると、それぞれの大木に名称札と注連縄を取り付け、薙鎌が打ち付けられます。かつては伐採まで付けて置いたのですが、盗難の恐れから、今は抜かれています。薙鎌は現在の使われ方からすると、国境を示すシンボル、儀式の威厳を保つための威儀物、御柱である象徴、神聖な場所であることを示す手段など、多くの要素を持っています。また、敵を威嚇する武器の性格も帯びているようです。「なぎ」が「凪ぐ」に通じることから風雨鎮護、諸難薙ぎ祓うの意味があるとして、風を切るあるいは水を切って水害から守ってくれる、さらに雨乞いで水をもたらしてくれる、といった説明もなされます。さらに諏訪神の信州開拓の象徴だともいわれます。

平成三年（一九九一）九月、明治十七年（一八七四）に北安曇郡小谷村に送ったと思われる薙鎌の原寸図が見つかりました。そこで、平成四年（一九九二）の御柱祭からは、その図に従って茅野市玉川の山田地区の鋸鍛冶衆「金山講」の皆さんが製作した薙鎌を使っています。この薙鎌は長さ三十一センチ、厚さ一ミリ余で、背中には羽が、嘴のすぐ上から頭部後方まで、後ろに向かって十三刻まれています。羽の先は尖っていて、鋸の歯にも見えます。頭部の嘴のように見える部位は上下が三角形にカットされて、あたかも鳥が口をあけているかのようです。嘴のように見える部分の後には目が開けられています。現在では御柱祭を行うに際して多くの場合、諏訪大社からこの薙鎌が頒与されています。

昭和49年の薙鎌〔小川神社〕

令和4年の薙鎌〔小川神社〕

各委員会事業報告

祭祀委員会活動報告

祭祀委員長　清住邦廣

令和四年度の祭祀委員会は主に、

一、各種研修会の開催

二、神社参拝促進事業について

三、神拝詞の作成について

という以上の三点を軸に進めてきた。

一、については神職として得るべき知識、また必要な研修歴に関わることであり、コロナ禍において「どうすれば開催できるか」という前向きな姿勢で取り組み、雅楽研修会・浦安の舞研修会・祭祀舞研修会を開催することができた。受講者、主催者が安心して開催できるよう、より精度の高い薬事承認された抗原検査キットを配布し、当日の朝に体調チェックリストとともに提出を求めた。また、国や県の発出する警戒レベルにより開催の有無を決定する為、案内発送時、締切時、開催一週間前を判断のタイミングとした。

第一回委員会研修会　松本市　岩崎神社

二、については県内各神社、各支部、また神社相互の連携的な取り組みを学ぶ為に、委員会研修会を開催した。第一回は松本市 岩崎神社にて森井禰宜に、第二回は木曽町日義 南宮神社にて越取宮司より講義を賜った。何れも氏子崇敬者の為にどんな教化活動を行っているのか、宣伝広報の観点や、地域的な特色と共に貴重なお話を伺った。今後も委員会として多くの情報を収集し、知らなければ知り得ない「教化活動」を何かしらの成果物として伝えていく道を模索していきたい。

三、については神社庁よりの依頼事項となり、教化部教化委員会と連携し、家庭で行える禊と神拝詞の作成を進めている。委員会の枠を超えて連携的に取り組むことで委員会活動の幅を広げることができたことに感謝を申し上げたい。

今年度の委員会は多くの委員に参加をいただき、活発な議論のもとで企画運営ができたように思う。コロナ禍での研修会開催は非常に厳しく、また未来を見据えた祭祀の興隆に繋がる提案が多く出され、時代に適応する意味においてＳＮＳを始めとする所謂ネット広報や、兼職と本職でできる教化活動が違ってくることなどを今後の課題として受け止めて、委員会としての結論を持ちたいと考えている。常に前向きで活発な委員の皆様に助けられながらの学び多き一年に感謝を申し上げたい。

第二回委員会研修会　木曽町日義　南宮神社

調査委員会活動報告

調査委員長　宇治橋牧子

昨年十一月二日より一週間にわたり、四柱神社斎館をお借りし「長野県神社御朱印展」を開きました。一社につき一枚、計百九社のパネルを展示。千四百七十人の方にご来場いただきました。

四柱神社様の参拝にいらした方に多くお立ち寄りいただき、また、三日文化の日は「松本城お城まつり」があり、周辺は歩行者天国。ＤＪポリスが登場するほどの大変な賑わいでした。観光客も多く、海外の方も来館。「御朱印とは何か」を多くの方に知っていただく機会となりました。

四柱神社参集殿

会場には、委員が一日三名、白衣白袴で常駐し、一つ一つ手作りした記念品（写真参照）を先着千名に進呈。中日に終了しましたが、若い女性にも大変好評でした。

御朱印帳用栞と留め紐のセット

会場ではアンケート用紙を渡し、年代や性別、感想等を訊きました。約九割の方にご回答いただき、一般の方が御朱印をどのように捉えているか、生の声を聞くことができました。自由記述の欄では「県内神社を知るきっかけになった」「御朱印を受けられる神社の多さに驚いた」「定期的に開催してほしい」といった感想や意見が目立ちました。この約千三百枚のアンケートは「御朱印に関する調査」と位置付けて取り纏めて参ります。

また、全来場者に本庁の教化資料三点を配布致しました。御朱印のみならず、神社、神宮大麻について一般の方の理解が少しでも深まることを願っております。

教化委員会
神道行法錬成研修会に参加して

水無神社　祢宜　宮田伊織

私は神道行法は神明に奉仕する神職にとって最も重要な次第であり、それを行うことで気持ちを清浄にし、布都御魂神、布留御魂神のお力を頂戴し、自分自身の魂を奮い起こすことで大神様の御心に近づけると考える。また、一方で多くの神職にとって馴染みが薄く、とっつきにくい分野だと思う。思い起こせば、私が指定実習を受けて初めて神道行法を行った時は、「何故、褌姿でこんなことをするのか」というのが正直な感想で、好奇の目

禊場（みそぎじょう）

に晒されていることへの苛立ちの思いもあった。それから奉職後に二度の神道行法を行う機会があったが、いずれも気持ちに折り合いをつけることができなかった。そして今回、長野県神社庁教化部主催の神道行法錬成研修会への参加は自分自身の変化が問われるものであった。研修会当日、寒空の下、禊祓が行われた。鉢巻と褌を身に着け、道彦に従い無我夢中に身体を動かし声を出し心を真っ新な状態に持っていこうとすることで邪念が祓われ清浄な状態に近づくという感覚を今回は無事に会得することができたと思う。その後、鎮魂が厳かな雰囲気の中行われ、心が静まったところで研修会は幕を閉じた。さて、神職の多くは今回のような研修会に参加しなければ禊祓と鎮魂を行う機会を得ることが大変難しく、参加しようとしても敷居が高く敬遠してしまう方も多いと思う。しかし、気軽に参加してみることで知見が広がり、神職同士の親睦も深める良い機会になると思うので、まだ参加したことのない神職の方は是非出ていただきたい。

鎮魂

コロナ禍で三年の中止　再開された子供参宮団

青少年対策推進委員会　副委員長　片山　求

第二十五回目の子供参宮団としては、募集は百名でしたが、全県からスタッフの委員や付き添い神職を含め総勢百二十名余りの参加をいただきました。

今回、子供参宮団に下高井支部から参加した子供たちは、コロナ禍で各神社の催しが制限され、舞姫や獅子のお稽古ができずにいた子供たちが中心でした。

参宮団に初めて個人で参加した子供の中には、三年前の当時小学校四年生たちがいました。これから高学年としてお宮への奉仕を期待していました。

中学一年生は友達も誘って大勢参加し、保護者も含め二十三名の参加をいただきました。

一日目のバス内では手水や参拝の仕方などを学習し、神宮に到着後は正式参拝とお神楽の奉納を済ませ、おはらい町やおかげ横丁を散策し神宮会館に宿泊しました。夕食時には、マナーの口添えで、お櫃からご飯を「盛る」ではなく「よそう」、「炊飯ジャーでは天地返しをして、余計な水分を飛ばすとおいしく食べることができるよ」、「よそう」時に「ふっくらするように二回か三回に分

第25回　参宮団　北信ローカル掲載

けるとおいしくいただける」ことも伝え、みんな実践してくれました。一粒も残さず感謝の気持ちを込めて食べきってくれていました。

翌日は雨風の影響で、予定した遊園地から名古屋港水族館へ変更となりましたが周遊を楽しんで帰路につきました。

中止を余儀なくされた三年間は、移動制限や行動制限で催し物が中止されて、コロナ禍に自由が奪われました。委員と共に綿密な計画を立てたお陰で、バス内には子供たちの笑い声と笑顔が満ちあふれていました。以下に作文を紹介します。

第25回　参宮団　手水

かみさまありがとう

小二

きょうは、いせじんぐうに行きました。たくさんの木がありました。お花や鳥やはしがありました。きれいな川もありました。手をあらったらとてもつめたかったけどきもちよかったです。川は、みどりでたいようがあたってキラキラしていました。とてもすてきでした。じんぐうでおまいりしたときは、かみさまがいっぱいいるようにかんじました。かみさまはいつもわたしたちをまもってくれているのでうれしかったです。わたしたちがしあわせにくらせているのは、かみさまのおかげとしりました。

これから、やさしくやくにたつ人になりたいとおもいました。なんでもありがとうというかんしゃのきもちをずっともっていたいです。

令和五年三月二十二日

お伊勢参り

中三

長野県からバスで約六時間。私は初めて三重県、伊勢に参りました。以前からぜひ訪れてみたいと思っていた場所の一つだったためとても楽しみにしていました。

幸い、天候にも恵まれ晴れ渡る青々とした空の下、この伊勢の地を楽しむことができました。まず驚いたことは神宮を囲む樹木の大きさです。私は山奥に暮らしているのでまさかこんなところに驚くとはと意表をつかれて気分でした。天までとどくのではないかと思うほどしなやかに大きく太くのびている木々、そしてその木漏れ日は息を飲む美しさでした。

今回訪れることが出来た内宮は厳かな雰囲気につつまれており言葉にしなくてもその神聖さが伝わってきました。ですが、どこかなつかしく、あたたかく、まるで辺り一帯が一つになっているかのように感じたのは昔から人々に根付いている信仰心が私にもあったということでしょうか。普段の生活ではなかなか気付くことができない悠久の時の流れに少し触れることができたようで本当に貴重な体験ができたのだなと嬉しく思いました。

御神楽は一つ一つの動きがとても丁寧で流れるように進む時の中、思わず見入ってしまいました。あの美しい時の流れも神様への思いから来ているのでしょう。何千年もの間、受け継がれてきたその心はぜひこれからも伝わっていってほしいと思います。

日常生活では気が付かないもの、触れることができないものを沢山感じ、見つめることが出来た一日になりました。ぜひもう一度、また新たな気付きを得ることができると信じて訪れてみたいと思います。

令和五年三月二十二日

戸隠山安全祈願祭及び開山式

岩場の多い戸隠連峰は古くから山岳修験の霊場として、全国各地から修験者が集った場所です。平安末期、後白河法皇編纂の『梁塵秘抄』には「四方の霊験所は伊豆の走り湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山云々」と記されています。修験時代の女人禁制は明治五年に解かれ、現在では四季を通じて登山を楽しむ人たちが訪れます。しかしながら修験の山にはいくつもの難所があり、転落遭難事故が後を絶ちません。

（一社）戸隠観光協会では毎年、戸隠神社本社（奥社）にて登山者の安全を祈願しております。特に今年は戸隠観光協会創立九十周年記念事業として六月七日、関係諸機関をはじめ多数の来賓を迎え特別な開山式を執り行いました。奥社参道口より白装束の杖祓いを先頭に法螺貝・太鼓の音祓いと共に戸隠神社楽部・山岳救助隊・警察・消防・来賓者等総勢百余名の行列は二kmの参道を奥社に向かい、水野宮司により戸隠山安全祈願祭が斎行されました。参道途中にある大講堂址では開山式が行われ、登山道の注連縄切り・登り初め・戸隠神社太々神楽（長野県無形民俗文化財）十座の内、修験の所作を伝える舞三座・東京オリンピック閉会式での和太鼓奏者「佐藤健作氏」による和太鼓演奏・金峯山寺本宗法螺師（戸隠流法螺師）「宮下覚詮氏」による法螺貝演奏が奉納され、その音色は戸隠山の峰々に響き渡り、参道を行き交う参拝者も足を止めて聞き入っていました。

奥社参道杉並木を進む参拝行列

戸隠神社太々神楽「随身の舞」

この大講堂址とは、奥社参道杉並木を抜けた旧院坊跡上部北側に位置し、ゼロ磁場とも言われる特別な場所です。礎石は径一m程度のものが縦十横六基の格子目に配置され相当大きな講堂屋敷であったことが窺え、十三世紀初頭頃まで存在していたとされます。

発掘以来この地に於いての行事は今回が初めてのことであり、修験色も交えて行われたことは大変に意義深いことと感じ、登山者の安全をより祈念致すところであります。

編集委員　辻　明紀

法螺貝 宮下覚詮氏　太鼓 佐藤健作氏

新しく任命された神職を紹介します

新任神職の横顔

中川（なかがわ）　航平（こうへい）　二十六歳
諏訪支部
諏訪大社　権祢宜

入社より数年間、出仕として修業の時間をいただき春より権祢宜として御奉仕させていただける身となりました。各先輩方の御指導により身についた技術と出仕から権祢宜という立場の変化は有りますが、常に謙虚な姿勢で日々の業務に取り組み、周りから信頼される神主になれるよう精進を重ねてまいります。

小松（こまつ）　聖弥（せいや）　二十六歳
諏訪支部
諏訪大社　権祢宜

私が百歳迄神職を今のお宮で奉仕したら七十四年の歳月がある。しかし人の測りでは長くとも神社の創始から今に至る迄の年数に比べれば七十四と言う数字は誤差の範囲だろう。しかし先人達も同じ歳月奉仕し積み上げた過去があるから今もお宮は健在なのだ。より良いお宮を後世へ残し伝えて行くべく神明奉仕に努めたいと思いました。

傘木（かさぎ）　信行（のぶゆき）　二十八歳
南安曇支部
穂高神社　権祢宜

此度安曇野市穂高鎮座穂高神社権禰宜を拝命致しました。昨年度まで県外の神社にて六年間奉職致して居りましたが、御縁を頂き地元長野にてご奉仕させていただく事となりました。浅学非才の身ではございますが、神職を始め氏子の皆様方より御指導御鞭撻を賜り、神社界の発展のため神明奉仕に努める所存であります。何卒宜しくお願い致します。

田上（たがみ）　美沙紀（みさき）　三十一歳
上水内支部
宇賀神社　権祢宜

此の度、宇賀神社権禰宜を拝命しましたして、古来より日本人が尊んできた「神様を想う真心」をいの一番に意識し浄明正直の精神で、ひたすらに神明奉仕に励みたいと思います。また地域の方々と密に繋がり合い、宇賀神社の繁栄、地域全体の活性化に貢献できるようどんなことにも盛んに挑戦していきたいと思います。若輩者ではございますが、今後とも御指導御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

寄附者顕彰　令和四年十一月～

長野県神社庁長感謝状　三十万円以上寄附

支部名	神社名	鎮座地	氏名
長野	玉依比賣命神社	長野市	中曽祢和夫
更埴	天皇子神社	千曲市	宮坂芳嘉
上伊那	子安神社	伊那市	草野和幸
上伊那	子安神社	伊那市	春日秀一郎
上伊那	子安神社	伊那市	芦澤直太朗

神社本庁表彰式　功労者を顕彰

神社本庁表彰式が五月二十四日神社本庁鷹司尚武統理ご臨席のもと、東京の明治記念館で行われた。

奉仕神社の施設経営に尽力した功労者、敬神の念が厚く多年神社の経営に協力した功労者として神職・役員・総代等二百五十七名が晴れの栄に浴した。

本県では次の四名が栄誉を受けた。

○令和四年度功績表彰

表彰規程第三条第二号　表彰状

子檀嶺神社宮司　宮原　滿

村上神社宮司　竹内　忠男

小菅神社宮司　鷲尾　隆男

表彰規程第三条第三号　表彰状

治田神社役員　髙村　征弘

辞令　令和四年十一月～

神社名	本兼職務	氏名	月日	支部名
昇級・神職身分一級				
四柱神社	宮司	宮坂信廣	三・一	松塩筑
昇級・神職身分二級上				
住吉神社	宮司	渡邉克彦	三・十	南佐久
大宮五十鈴神社	宮司	白鳥俊明	三・十	上伊那
八幡社	宮司	五明貴寿	三・十	更級
豊岡神社	宮司	富岡晋一	三・十	上水内
昇級・神職身分二級				
諏訪社	宮司	猿谷英俊	四・一	南佐久
満島神社	宮司	遠山景一	四・一	飯伊
冨士山稲荷神社	祢宜	市原日貴	四・一	飯伊
和泉神社	権祢宜	遠藤綾子	四・一	松塩筑
穂高神社	権祢宜	小平和彦	四・一	南安曇
諏訪神社	宮司	須澤清昭	四・一	南安曇
別表神社宮司代務者任命				
穂高神社	宮代	保尊　勉	四・一	南安曇

任命

八幡神社	兼宮司	三浦善文	十二・一	飯伊
御嶽神社	兼宮司	清住邦廣	一・十五	上小
飯沼神社	兼宮司	清住邦廣	一・十五	上小
愛宕神社	兼宮司	清住邦廣	一・十五	上小
二柱神社	兼宮司	清住邦廣	一・十五	上小
伊勢宮	兼宮司	清住邦廣	一・十五	上小
諏訪護國神社	本権祢宜	渡部長治	四・一	諏訪
大宮飯沼神社	兼宮司	今井　佑	四・一	上伊那
上宮外縣神社	兼宮司	今井　佑	四・一	上伊那
八幡神社	兼宮司	今井　佑	四・一	上伊那
深志神社	本権祢宜	大塚宗延	四・一	松塩筑
嚴島社	兼宮代	保尊　勉	四・一	南安曇
矢原神明宮	兼宮代	穂高賢一	四・一	南安曇
諏訪神社	兼宮代	穂高克彦	四・一	南安曇
天神社	兼宮司	片山光一	四・一	上高井
水穂神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
伊勢神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
大山祇神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
豊足穂神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
誉田別神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
猿田彦神社	兼宮司	倉科幸広	四・一	下高井
諏訪八幡神社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
深沢神社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
豊受社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
日高見神社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井

日里御宰建神社	兼	宮司	望月俊仁	四・一	下高井
越智神社	兼	宮司	望月俊仁	四・一	下高井
伊勢社	兼	宮司	櫻井龍一	四・一	長野
伊勢社	兼	宮司	櫻井龍一	四・一	長野
鬼木立神社	兼	宮司	名取人利	六・一	諏訪
小内神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
高野神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
諏訪社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
宮王神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
蟹原神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
萬年嶋神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
冨士社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
和田中神社	兼	宮司	勝山　裕	六・十五	上高井
子檀嶺神社	本	祢宜	宮原　久	七・一	上小

昇任

白鳥社	宮司	三浦善文	十二・一	飯伊

新任

諏訪大社	権祢宜	酒井壱啓	三・三十一	諏訪
諏訪大社	権祢宜	中川航平	四・一	諏訪
宇賀神社	権祢宜	田上美沙紀	四・一	諏訪

転入

諏訪大社（愛知県　針綱神社より）	権祢宜	小松聖弥	四・一	諏訪
穂高神社（新潟県　白山神社より）	権祢宜	傘木信行	四・一	南安曇

本務替

子檀嶺神社（深志神社より）	祢宜	清住邦廣	一・十五	松塩筑
深志神社（分霊御厨明宮より）	権祢宜	大塚宗延	四・一	松塩筑

休職

穂高神社	宮司	穂高光雄	三・三十一	南安曇

辞職

八幡神社	兼	宮司	奥田　栄	十一・三十	飯伊
御嶽神社	兼	宮司	清住宗廣	一・十四	上小
飯沼神社	兼	宮司	清住宗廣	一・十四	上小
愛宕神社	兼	宮司	清住宗廣	一・十四	上小
二柱神社	兼	宮司	清住宗廣	一・十四	上小
伊勢宮	兼	宮司	清住宗廣	一・十四	上小
深志神社	本	権祢宜	清住邦廣	一・十四	松塩筑
諏訪大社	本	権祢宜	渡部長治	三・三十一	諏訪
諏訪社（東京都　御霊神社（転出）	本	権祢宜	守谷幸慶	三・三十一	諏訪
諏訪社（東京都　布多天神社（転出）	本	権祢宜	小林　亨	三・三十一	諏訪
大宮飯沼神社	兼	宮司	今井　泰	三・三十一	上伊那
上宮外縣神社	兼	宮司	今井　泰	三・三十一	上伊那
八幡神社	兼	宮司	今井　泰	三・三十一	上伊那
天神社	兼	宮司	片山　昭	三・三十一	上高井
小内神社	兼	祢宜	押見友仁	三・三十一	上高井
伊勢神社	兼	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
大山祇神社	兼	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
豊足穂神社	兼	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
誉田別神社	兼	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
猿田彦神社	兼	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
諏訪八幡神社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井
深沢神社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井
豊受社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井

退職

日高見神社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井
日里御宰建神社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井
越智神社	兼	宮司	望月厳穂	三・三十一	下高井
伊勢社	兼	宮司	矢澤龍一	三・三十一	長野
伊勢社	兼	宮司	矢澤龍一	三・三十一	長野
妻科神社	兼	権祢宜	水庫清之	三・三十一	長野
高野神社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
諏訪社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
宮王神社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
蟹原神社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
萬年嶋神社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
冨士社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
和田中神社	兼	宮司	片山　昭	六・十四	上高井
生島足島神社	本	権祢宜	宮原　久	六・三十	上小
白鳥社	宮司	奥田　栄	十一・三十	飯伊
諏訪神社	祢宜	井出　昇	三・三十一	南佐久
諏訪大社	権祢宜	酒井壱啓	三・三十一	諏訪
水穂神社	宮司	大角六七人	三・三十一	下高井
八幡宮	祢宜	益子吉麿	五・三十一	松塩筑
小内神社	宮司	片山　昭	六・十四	上高井

帰幽　謹んで御霊の安らかなることをお祈りいたします

奉務神社　職名	階位・身分	氏名	帰幽日	支部名
諏訪大社権祢宜	明階・三級	澁川慧伍	一・三十	諏訪
縣神社宮司	正階・二級上	畠山昌親	三・五	南佐久

令和５年度長野県神社庁歳入歳出予算書

歳入の部　（単位：円）

款	科目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	幣帛幣饌料	704,800	740,000	△35,200	神社本庁より
2	交付金	112,560,000	113,618,000	△1,058,000	本庁交付金
3	負担金	33,940,000	34,165,000	△225,000	支部負担金、神社負担金、神職負担金、特別寄贈金
4	協賛金	5,910,000	3,762,000	2,148,000	特別協賛金、寄付金
5	財産収入	500,000	500,000	0	財産利子配当金
6	補助金	120,000	120,000	0	神社本庁より参事給与補助金
7	各種証明料	2,920,000	2,920,000	0	神職任命・登録料、承認料、各種手数料・証明料、階位授与交付金
8	諸収入	2,500,000	2,500,000	0	賽物収入、雑収入
9	管理費収入	600,000	600,000	0	庁舎管理費収入、関係団体管理費収入
10	過年度収入	200,000	200,000	0	
11	繰越金	20,045,200	22,875,000	△2,829,800	
	合計	180,000,000	182,000,000	△2,000,000	

歳出の部　（単位：円）

款	費目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	神宮神徳宣揚費交付金	46,700,315	53,876,240	△7,175,925	支部を通じて各神社へ
2	幣帛幣饌料	9,000,000	9,000,000	0	別表及特別神社、本務・兼務神社、献幣使参向神社、幣饌料供進神社、献幣使・随員旅費等
3	会議費	4,500,000	5,200,000	△700,000	会議旅費、諸費
4	庁務費	38,706,000	40,356,000	△1,650,000	神事費、儀礼費、役員報酬、諸給与及び福利厚生費、需要費
5	負担金	28,309,520	26,592,432	1,717,088	神社本庁へ
6	事業費	13,900,000	17,100,000	△3,200,000	大麻関係費、教化部費、庁報発行費、東海五県連合会費等
7	研修諸費	300,000	200,000	100,000	神社庁研修諸費
8	庁舎維持費	500,000	660,000	△160,000	修繕費、設備費、火災保険費
9	交付金	2,500,000	3,400,000	△900,000	神職会、総代会交付金
10	積立金	2,300,000	3,500,000	△1,200,000	役職員退職積立金、五県連合総会積立金
11	補助金	50,000	50,000	0	時局対策費
12	新庁舎建設費	26,500,000	0	26,500,000	新庁舎建設事業会計へ
13	予備費	6,734,165	22,065,328	△15,331,163	
	合計	180,000,000	182,000,000	△2,000,000	

令和５年度長野県神社庁災害救助慰藉特別会計歳入歳出予算書

歳入の部　（単位：円）

	科目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	負担金	3,285,000	3,275,000	10,000	支部負担金、神職掛金
2	災害救助慰藉特別会計交付金	100,000	700,000	△600,000	神社庁、総代会
3	本庁見舞金	150,000	150,000	0	
4	雑収入	1,000	1,000	0	雑収入
5	繰越金	6,464,000	5,874,000	590,000	
	合計	10,000,000	10,000,000	0	

歳出の部　（単位：円）

	費目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	災害慰藉費	3,685,000	3,685,000	0	神社災害慰藉費、神社総代慰藉費、神職災害慰藉費
2	神職掛金	2,085,000	2,075,000	10,000	神職掛金積立金
3	本庁災害慰藉費	300,000	250,000	50,000	災害対策資金
4	運営費	60,000	60,000	0	事務費、旅費、雑費
5	予備費	3,870,000	3,930,000	△60,000	
	合計	10,000,000	10,000,000	0	

舞見中暑

諏訪大社

上田市下之郷中池西七〇一
生島足島神社
宮司代務者 池内宣裕
氏子総代長 工藤勇
職員総代一同

戸隠神社
名誉宮司 藤井茂信
宮司 水野邦樹
他 職員一同

穂高神社
名誉宮司 小平弘起
宮司 穂高光雄
宮司代務者 保尊勉
職員一同

松本市美須々六番一号
長野縣護國神社
宮司 奥谷一文
他 職員一同

松本市
四柱神社
宮司 宮坂信廣
他 職員一同
http://www.go.tvm.ne.jp/~yohashira

深志神社
名誉宮司 遠藤久芳
宮司 牟禮仁
他 職員一同

諏訪市茶臼山鎮座
手長神社
宮司 前島正

武水別神社
宮司 堀内潔人
他 職員一同

若一王子神社
宮司 竹内直彦
大町市大字大町二〇九七

木曽総社
御嶽神社
宮司 武居哲也

木曽御嶽王滝
御嶽神社
宮司 滝和人

飯田市浜井町
破魔射場鎮座
冨士山稲荷神社
宮司 市原貴美雄
職員総代一同

佐久総社
新海三社神社
宮司 井出行則
総代長 中條清一
佐久市田口鎮座

上田市常田鎮座
総社大宮
科野大宮社
宮司 今井貴美
総代会長 宮下憲治

上田市中央北鎮座
眞田三代崇敬社
大星神社
宮司 関口守和
祢宜 工藤康高
総代長 山崎建治

飯山市小菅の里鎮座
小菅神社
宮司 鷲尾隆男
総代会長 丸山重吉

上伊那郡辰野町
三輪神社
宮司 矢島正稔

上伊那郡飯島町
梅戸神社
宮司 今井泰
祢宜 茅野理也
権祢宜 今井佑

上伊那郡辰野町小野
矢彦神社
宮司 立澤寿江
祢宜 立澤俊輔
総代会長 小野猛夫

暑中見舞

大御食神社
宮司 白鳥俊明
権祢宜 白鳥操子
総代会長 富岡清彦
新井亮男

木曽郡木曽町福島鎮座
水無神社
宮司 宮田利彦
祢宜 宮田伊織

あづみ野
住吉神社
宮司 飯田泰之
氏子総代会長 小穴善一

松本市梓川梓鎮座
大宮熱田神社
宮司 山田充春

上水内郡小川村小根山鎮座
小川神社
宮司 宮下俊樹
祢宜 太田陽一
総代長 大日方健治

七二会鎮座
式内社
守田神社
宮司 櫻井龍一
主任総代 酒井健次
会計 成田眞一

木曽郡木曽町開田高原西野
八幡宮
宮司 神田肇
祢宜 毛利ゆき乃

長野市箱清水鎮座
湯福神社
宮司 齋藤安彦
権祢宜 齋藤友加里
齋藤紳悟

長野市東町鎮座
武井神社
宮司 齋藤吉睦

長野市松代町鎮座
象山神社
宮司 瀧澤基
祢宜 瀧澤けい子
権祢宜 瀧澤理恵

岡谷市小井川鎮座
小井川賀茂神社
宮司 有賀寛典

飯田市八幡町一九九九
鳩ヶ嶺八幡宮
（重要文化財誉田別尊神像）
宮司 伊原義雄
総代会長 高橋宣明

国宝
仁科神明宮
大町市社宮本
宮司 松井秀吾
氏子総代会長 一志裕

伊那市荒井区
荒井神社
宮司 唐沢克忠
祢宜 唐沢光忠
総代会長 矢島宏

長野市岩石町鎮座
えびすの神
西宮神社
宮司 丸山肇
祢宜 丸山智
役員総代一同

安曇野市穂高有明字宮城
彫刻で名高き裕明門
有明山神社
宮司 山崎佳宏
総代会長 塚田銀稲

箕輪南宮神社
宮司 唐沢克忠
祢宜 唐沢光忠
総代会長 熊谷修
箕輪町大字中箕輪木下一二五〇〇

塩尻市中西條鎮座
三嶽神社
宮司 宇治橋牧子
権祢宜 宇治橋邦彦

塩尻市北小野鎮座
小野神社
宮司 宇治橋淳
祢宜 宇治橋邦彦
総代会長 青木俊樹

松本市村井町
神明宮
宮司 永持はな子
祢宜 宇治橋邦彦
権祢宜 小穴真希

暑中見舞

伊那市御園区鎮座
白山社
宮司　伊藤光宣

長野市三輪鎮座
美和神社
宮司　齋藤吉睦
権祢宜　矢澤龍一

駒ヶ根市赤穂鎮座
大宮五十鈴神社
宮司　白鳥俊明
祢宜　白鳥操子
http://isuzujinja.com

長野市大町鎮座
長沼神社
宮司　長沼忠行
祢宜　長沼房子
権祢宜　長沼誠一

上伊那郡南箕輪村
殿村八幡宮
宮司　唐沢克忠
祢宜　唐沢光忠
総代会長　有賀幹隆

長野市松代町皆神山
熊野出速雄神社
（皆神神社）
宮司代務者　武藤弘樹

奥州一之宮鹽竈神社御分社
鹽竈神社
宮司　大澤明三
祢宜　大澤節子
総代会長　蜂谷泉

安曇野市豊科南穂高
洲波神社
宮司　宮澤佳廣

飯山市五束鎮座
（国重文若宮八幡社）
健御名方富命彦神別神社
宮司　髙橋穣
祢宜　髙橋晶
総代会長　松木隆一

佐久市臼田鎮座
稲荷神社
宮司　伴野健一
総代会長　久義重

木曽郡南木曽町田立鎮座
県無形民俗文化財花馬祭り
五宮神社
宮司　髙橋邦衛

東筑摩郡筑北村坂北鎮座
無形文化財お田植祭り
刈谷澤神明宮
宮司　山崎洋文
総代会長　堀田勇

佐久市鎮座
平賀神社
宮司　小間澤肇
祢宜　小間澤貴子
総代会長　高橋登

編集後記

令和五年度は新神社庁氏子会館がすごい勢いで出来上がっていきました。この神州の夏号137号に七月五日の竣工検査の写真を載せることができました。

新しく素晴らしい建物が見晴らしの良い丘の上に建てられました。感激ひとしおですが、建設委員の皆様は対応に追われ大変な思いで対処されております。会議を重ねてさまざまな問題を話し合い、協力していただいている県下神社関係者にわかりやすく諸事情を説明して、ご理解いただけるよう努めております。

特筆すべきことがあります。県立歴史館の笹本特別館長が、県下の薙鎌の調査をされていることを知り、神州への掲載をお願いしたところ快く引き受けていただきました。今回から複数回にわたり掲載予定です。信州一の宮、全国のお諏訪さまの御本社に関係の深い薙鎌をわかりやすく解説していただきました。皆様の関係神社に未調査の薙鎌がございましたら長野県神社庁「庁報編集委員会」にお知らせください。

暑い日が続きますご自愛の上ご活躍ください。

編集長　山崎洋文

新神社庁氏子会館竣工検査

令和５年７月５日撮影